

## 展覧会評

## ソウルの古宮で見るアジアのキュビズム

金 恵 信

私は一九九二年、日本の大学院博士課程に入り、近代美術の研究を始めた。その年東京都庭園美術館で「洋画の動乱―昭和一〇年帝展改組と洋画壇―日本・韓国・台湾」を見た。そして、それ以来、日本国内の美術館で開かれる韓国近現代美術関連展示に関心を持つようになった。一九九〇年代半ば以降は、日本の美術館でこのような関心を触発する韓国近現代期の美術作品を含む企画展示が増えてきた時期でもあった。<sup>(1)</sup>

これらの展示は日本である程度まとまった規模で韓国近現代美術を見る機会となった点で意味を持つ。同時にそれぞれの展示に携った両国の学芸員または研究者たちが持っている韓国の近い過去または同時代美術を見る視覚とそれを展示という形にする見せ方がうかがえる場でもあった。ここに挙げた展示では、韓国美術は「ここ」の領域へや「等身大の物語」、日本と韓国の現代美術は「還流」の流れや「自己と他者の間」というタイトルを持っていた。九〇年代の終わり頃になると、展示名称に「東アジア」が含まれるようになる。それは歴史学をはじめとする諸学問領域における「東アジア」または「北東アジア」にも相応するものだったといえる。「アジアのキュビズム―境界なき対話」展は、その地域認識の範囲をさらに広げている。ここでは韓国側の企画過程およびソウル展示の特徴と反応などを中心に観てみることにする。

この展示は最初日本側が企画案を出し、それにアジア各国の美術館が共同企画者として参加するかたちで実現した。中国、インド、インドネシア、日本、韓国、マレーシア、フィリピン、シンガポール、スリランカ、タイ、ヴェトナムの十一カ国

から一二〇点近い作品が集まり、展覧会の地図は北東のアジアを越え、東南と南アジアまで及んだ。展示は、日本の国立近代美術館を皮切りに、韓国の徳壽宮美術館（国立現代美術館分館）、シンガポール美術館を八カ月に渡って巡回した。キュビズムというモダンアートの概念自体は、展示を作るアジア各地域の美術館関係者や研究者にとっては周知の事柄だったはずである。この展示はそれを今の時点で振り返り、それぞれの地域における歴史として捉え作品を並べる行為の意味を問うものでもあった。そのことをソウル展の展示場入り口のパネルの一文から読むことができる。

キュビズムはアジア地域で一九五〇年代を頂点にどのように受容され、人気を博し、足早に立ち去っていたのか、という多少素朴な質問は、従って巨視的には二〇世紀世界史においてアジアを見る視覚への具体的な糸口を与えている。同時にそこには文化的アイデンティティーへ向けてのアジア各国の時には活気に満ち、時には空しい試みが見え隠れする。<sup>(2)</sup>

国立現代美術館では企画検討の段階で二つの問題が提起されたという。<sup>(3)</sup>ひとつは、韓国にいわゆるイズム *ism* と呼ぶに相応しいキュビズムがあるのかということ、もうひとつはこれだけのアジアの諸地域の作品を同一空間に並べた際にどちらかが見劣りすることがあるのではないか、ということだった。しかし、「アジア」というコンセプトのもつ文化的意味を美術の側面から検証する手がかりになるということ、そしてひとつの美術傾向を取り上げアジアの諸地域の美術を並べる展示を該当地域の美術館の連携で実現できることに意味を置き、企画に参加することにした。それは上のパネル文で締めくくられているとおり、「アジアの人々によって書かれたアジア文化史の一頁」への試みだった。

「アジアのキュビズム」展を観るためソウルへ向かったのは、二〇〇六年一月二十九日だった。ちょうど旧正月の連休と週末が重なり、その日は旧暦の大晦日に当たる日だった。普段は出張客とツアー客で連日満席になるという羽田発金浦着の機内

に乗客は疎らだった。日本のお正月連休と同じく、この時期の韓国はビジネスと観光には不向きな場所なのである。

翌日、つまり元旦の朝、同行した東京文化財研究所の田中淳氏といっしょに徳壽宮<sup>トッス</sup>に行った。徳壽宮美術館（国立現代美術館分館）はこの宮殿の敷地内にあり、展示観覧料とは別に宮殿入場料が必要だが、元旦の日は無料だった。入り口には伝統の布に刺繍が施されている小さいボクジュモニ（福袋）がお正月土産として用意され、入場客が好きな色を選べるようになっていた。

徳壽宮の中には朝鮮王朝の宮殿の建物以外に、二棟の西洋式建物があり、そのひとつが徳壽宮美術館として使われている。広い石段を登った二階の入り口から美術館に入る。吹き抜けのホールを中心に一階と二階に左右ひとつずつ展示室がある。奥行き長い展示室は展示作品の配置に沿って緩やかに区切られ、入口からはみると、左右に分かれた展示空間となっていた。各展示室のテーマパネルを見てみよう。

第一展示室は「テーブルの上の実験・静物」のセクションで、楽器、果物、静物としての人体の作品に続いて、キュビズムを通過した独自の造形と様式としての「グリッド・アラベスク・フィルター」の絵、〈中国現代木版画〉の静物作品が展示されていた。向かい側にある第二展示室は「キュビズムとモダニティ」セクションで、画家たちのパリ留学をアジア美術とキュビズムの遭遇に例え、近代都市のリアリティーを描いた作品と、その現実をさらに社会的、政治的文脈で捉えた〈機械時代の反響〉と〈戦争体験とキュビズム〉の絵が並んでいた。二階の第三展示室「身体」のセクションは、自画像、女性像、裸婦、群像といったさまざまな人物像がクローズアップされて登場するなか、〈母子像〉が大きい割合を占める展示となっていた。最後の第四展示室「国家―国民の創生」セクションでは、戦後独立国家として新たな国民国家作りを始めたアジアの国々の画家が、自国の美術文化に対するアイデンティティーを問い直す方法として選んだキュビズムの絵が見られる。歴史、〈都会と農村の生活〉、〈地域固有の風物〉、〈宗教〉、そして〈故郷の発見〉。タイのアユタヤ遺跡、マレーシアの黄金のパゴダ、シンガポールの小川、中国の海岸風景、日本の観音と木の間風景が並ぶ故郷の絵。向かいの壁には、展覧会図録でも〈宗教〉と共に最後に言及されているヘピカソ、抽象表現主義とカリグラフィ<sup>5</sup>と題され、

ソウルの古宮で見るアジアのキュビズム

植物モチーフの熱帯風景の絵が掛かっている。

展示の終わりは、日本以外のアジア地域の戦後を訪れたキュビズムの全盛期が、その後に来る抽象表現主義への傾度とつながっていることを示唆している。金英那<sup>キムヨンナ</sup>氏が指摘しているように、韓国におけるキュビズムは様式の側面から言うなら、具象芸術から非具象芸術への橋渡しの役割をしたといえる。<sup>4</sup>戦後の非西欧圏の画家たちにとって、モダンアートの革命であるキュビズムは、新たな国際美術の流れの乗るために急いで経験済みの事項にする必要がある通過儀礼だったと言える。そういう意味で興味深い作品が朴永善<sup>パクヨクサン</sup>の《パリの道化師》（一九五七）である。正装したピエロとその化粧顔のプロフィール、左足の中心をずらしたポーズの西洋の裸体女性像、サーカスの曲芸士、馬の頭、球、花瓶、家族写真のような肖像画、雑多なイメージが、分割された平面の中で重なり合っている。金基昶<sup>キムキヤン</sup>の《収穫（大麦の脱穀）》（一九五六）は具象性の強い韓国画である。麦の稲を運び、脱穀機にかけ、杵を突く農村の女たちの動きが単純化された白いチマチョゴリの作業着や労働する手足の仕草からは、キュビズムと名づけなくてもそれに近い造形性が感じられる。

朴峯賢<sup>パクレヒョン</sup>の《屋台》（一九五六）は、この時期の韓国現代絵画でもっとも注目すべき絵である。三年余続いた韓国戦争（一九五〇―一九五三）が休戦というかたちで一旦終わり、ソウルでは避難生活から戻ってきた人々が新たな日常の営みを始めていた。けっして豊かではない街に露店商とお客の女たちが立っている。車輪付の屋台の前に両手であごを付いた姿勢で腰掛ける女の後には、子供を背負いお魚の入った大きいタライを頭に載せた行商の女が立っている。屋台の女性たちは、《パリの道化師》のような西欧人の顔でも、《収穫（大麦の脱穀）》のような韓国人の顔でもない。国際潮流に乗り遅れまいという力みや伝統に根ざさねばという気負い、そのどちらからでもいい距離を持っている作品だと思う。

金仁恵氏<sup>キムインヘ</sup>は、この展示に出たアジア諸地域のキュビズム作品の多くが、いわゆる「本場」キュビズムが出発点としていた分析的・科学的視覚ではなく、その後に来るピカソの《ゲルニカ》（一九三七）時期の様式に近い傾向を見せていることを指摘する。<sup>5</sup>その例として挙げたロメオ・タブエナの《物乞い》（一九五六）、山本敬輔の《ヒロシマ》（一九四八）、マナンサラの《十字架降下》（一九七二）は、様式の変

遷を経てないというより、それぞれの地域で実験されたいわば圧縮されたキュビズムを見せてくれているといえよう。

展示そのものは東京での展示とほぼ同じ構成になっている。しかし、中央ホールを中心に左右対称に配置されている展示室を出入りしながら見る順路のせい、展示を見た後の感想は東京展の時とは違うものだった。さらにソウル展示には東京展示では見られなかった特徴がふたつあった。ひとつは、絵の前の床にそれを描いた作者の国名のアルファベットがテープ張りで書かれていたことである。まるでオリンピックの出場国名ピケットを連想させる国名表記の理由を担当学芸員に聞いてみた。国名のテーピングは最初からあったのではないという答えだった。展示を見に来た観客からもっとも多い質問が、「この絵を描いた画家はこの国の人ですか？」だったので、国名を貼ることにしたという。ソウルのキュビズム展の会期の後半は、韓国の初等学校（小学校）から大学までの冬休みと重なっていた。一月中旬過ぎからは学生たちが展示場に溢れる日が多くなり、結果的に床の国名テープは役に立たずと評価されているという。

ソウル展示のもうひとつの特徴は、第一展示室の奥に設けられた「絵画宮殿」というコーナーだった。これは展示を見に来た子供たちのために、小さいサイズのイーゼルと椅子、クレヨン、画用紙が置かれている、いわゆる子供美術体験空間だった。<sup>(6)</sup>展示の最終日を翌日に控えた国民の休日だったので、絵を描いているのは、家族と徳壽宮に来ていた民族衣装姿の幼い姉と弟の二人だけだった。壁には前にここを訪れた子供たちが残した絵が多く貼られていた。絵の共通テーマは、「私もピカソになれる」。親のための指導要領には、「キュビズムとはさまざまな角度から見つめたものを同時に表現する美術で、ピカソらはその創始者です」と書いていた。大きい目と鼻と口が顔の輪郭線を離れた顔、原色のクレヨンで勢いよく描き飛ばした花と木を太陽と家など、いわゆる「ピカソ」たちがそこにはあった。反対の壁際に置かれた長いテーブルの上には、子供向けの美術教育の絵本が置かれていた。私は何気なく読み始めたタイトルに目を奪われた。『天才性を呼び覚ます名画物語』、『考えるロダン』、『空飛ぶシャガル』、『マチスと共にダンスを』、『ガウディ、夢で建てた家』、『不思議な国のダリ』、『黄金の魔法使い、クリムト』、『ゴッホの国へ遊びに

行こう』、『おしゃれなモンドリアン』、『夢見る天使、クレ』、そして、『わんぱく坊主、ピカソ』。

美術館を出た。階段の下には噴水のある西洋式庭園、その先に宮殿の正殿が見える。美術館の左側にある石造殿は、朝鮮王朝の末期大韓帝国と国名を改めた国王の執務空間として一九一〇年に完成したヨーロッパ新古典主義様式の建物である。徳壽宮周辺はソウル市庁、韓国銀行、大企業が並ぶ行政・金融の中心であると同時に、近代初期イギリス、ロシアなど多くの外国の公使館があった、いわゆる歴史が刻まれた地域でもある。日本による殖民統治期の一九三〇年代には、日本美術の名作を所蔵・展示する李王家博物館として使われた。<sup>(7)</sup>徳壽宮内のこの二つの西洋宮殿風の建物は、一九五〇年代から戦後押し寄せた西欧美術、中でもアメリカ現代美術の展示空間となった。<sup>(8)</sup>

多くの韓国の人たちにとって、徳壽宮は美術展覧会が開かれる場所として記憶されているといえる。私はすぐ近くにある女子高を卒業したが、美術の授業の一環として徳壽宮で開催する展覧会を見学したり、写生大会に参加したりした。授業の後、友たちと遊びにも行った。今回アジアのキュビズム展を見ながら私がずっと思い出していたのは、一九七〇年代徳壽宮であった韓国で初めてのピカソ展のことだった。当時中学生だった私と小学生だった妹と弟は、親の知人の娘であるお姉さんと一緒に展覧会を見に行った。大学卒業後アメリカの留学中で、たまたまソウルに戻っていた彼女が可愛がってくれていた私たちを話題の展覧会に連れていってくれたのだ。徳壽宮は西欧美術の巨匠の絵を見にきた人たちが溢れかえっていた。人波に押されながら展示場を回り、噴水台のある庭園に出たが、何を見たのかはほとんど覚えていなかった。今、その時見たと思っているのは、その後私が受けた美術教育によるものに違いない。ピカソは複数の視点をひとつの平面に描く現代美術の革命児、という知識も。徳壽宮の屋外には、旧正月に楽しむ伝統の遊び道具が置かれ、民族衣装を着た多くの家族連れのソウル市民が伝統の遊びを楽しんでいた。冬にしては暖かく風もない穏やかな日だった。

「アジアのキュビズム」展の別紙年表には、次のような副題が付いている。

アジアには一〇〇人のピカソがいる。

自らの力で近代期を迎えることなく終焉を迎えた朝鮮王朝の激動の末期を覚えて  
いる徳壽宮、その真ん中に鎮座する西洋式宮殿の建物に並ぶ一〇〇人余りのアジア  
のピカソ。わんぱく坊主ピカソの自由気ままな絵の真似を体験していた民族衣装を  
着た韓国の子供たち。私に「アジアのキュビズム」展はその子供たちの作品を集め  
て作った西洋美術の絵本のように映った。それはアジアの国々が常に遅れや躓きを  
抱えて追いかけてきた西欧だった。アジア各国の美術館が共同で作ったこの展示は、  
さまざまなアジアが持っている西欧を見る眼を、自分たちの卓上の上の実験として  
出し合うことで、アジアの国同士がお互いに眼を向けることができたことにその意  
味があるだろう。<sup>(9)</sup>

ソウル展示入口のパネルに戻ろう。

韓国とアジア、アジアとヨーロッパ、韓国とヨーロッパ等が、絶えずお互いを  
参照し、〃境界なき対話〃を交わす間柄、他者との関係においてのみ存在する  
自我を反映する機会として、この展示の意味が生きてくることを願う。

他者の眼に映る自分と自分の内面に潜む他者、そのまなざしは展示の場で時には  
響き合い、時にはすれ違う。美術展示とはそのまなざしを提供し、その空間に行き  
かうまなざしを受ける場であるということを、自分の眼で確かめていきたい。それ  
が美術展示という視覚イメージの提示装置が、自らの歴史的位置付けに不可欠な観  
客に与えることのできる展覧会の醍醐味であろう。これからも近代に対する歴史認  
識を踏まえ、お互いのアジア認識の相違という課題に取り組み試みとしての美術企  
画展が観られることを願う。

ソウルの古宮で見るアジアのキュビズム

註

- (1) ここで、主に国公立美術館に限ったものではあるが、私が見たり、多少なりとも  
関わってきたりした展示を中心にその手の展示を挙げてみると、「このころの領域」  
(一九九五、水戸芸術館現代美術センター)、「還流 日韓現代美術」(一九九五、愛  
知県立美術館、名古屋美術館)、「九〇年代の韓国美術から―等身大の物語」(一  
九九六、東京国立近代美術館、国立国際美術館)、「日韓現代美術展 自己と他者の  
間」(一九九八―一九九九、目黒区立美術館、国立国際美術館)、「東アジア／絵画  
の近代―油絵の誕生とその展開」(一九九九、静岡県立近代美術館、兵庫県立近代  
美術館、徳島県立近代美術館、宇都宮美術館、福岡アジア美術館)、「秘すれば花―  
東アジアの現代美術」(二〇〇五、森美術館)、「光州事件から二五年―光州の記憶か  
ら東アジアの平和へ」(二〇〇五、京都市美術館別館) などがある。
- (2) ソウル展の展示場入り口の展示説明文パネルから。
- (3) 韓国国立現代美術館学芸員金仁恵さんのインタビュー。二〇〇六年四月四日、  
ソウル徳壽宮美術館資料室
- (4) 金英那「韓国におけるキュビズム」「アジアのキュビズム」展図録掲載論文一四  
六―一四九頁
- (5) 金仁恵「아시아의 타자문화 수용사」(アジアの他者文化受容史)『월간미술』(月  
刊美術)二〇〇六年二月、一〇二―一〇七頁
- (6) 韓国の美術館と博物館、歴史資料館などの展示施設には、見学に来る学生たちが  
非常に多い。特に夏と冬の休み期間中は、学校の宿題のためにノートをとりながら、  
いつまでも陳列ケースの前を離れない生徒たちによく出会う。「アジアのキュビス  
ム」展を取り上げた新聞記事からも、学校の冬休みに合わせて展覧会を美術体験学  
習の場として紹介する見出しが目立った。「文化観光部へ美術館体験レポート作り」  
イベントに参加しよう……徳壽宮美術館で開催するプログラム』『連合ニユー  
ス』二〇〇五年二月二六日、「体験レポートの書き方、美術館が教えてくれます  
……私もキュビズム画家です」『少年韓国日報』二〇〇六年一月一日など。
- (7) 李王家美術館と関連展示については、以下の論考を参照されたい。  
内山武夫「韓国国立中央博物館の近代日本画」、竹内順一「日本近代工芸の概観  
―実用と芸術の間」、金承熙「徳壽宮石造殿の日本近代美術品展示」、以上は「韓  
国国立中央博物館所蔵 近代美術展」図録(二〇〇三、東京藝術大学大学美術館)、  
李美那「李王家徳壽宮日本美術品展示―植民地朝鮮における美術の役割」(「東ア  
ジア／絵画の近代―油絵の誕生とその展開」展図録、後小路雅弘「李王家コレク  
ションを戦後初公開」『西日本新聞』二〇〇二年二月二六日

(8) 金英那 「1950년대 아시아 문화와 미국.. 일본과 미국 한국과 미국 (一九五〇年代アジア文化とアメリカ..日本とアメリカ、韓国とアメリカ)」「アジアのキュビズム展・境界なき対話」関連行事 国際シンポジウム「アジアの二〇世紀美術」資料集、四八～五八頁、二〇〇五年一月一九日、韓国国際交流財団文化センター

(9) アジアのキュビズム展は、二〇〇五年韓国で開催された美術企画展示の中から選ばれた優秀展示のひとつに選ばれた。一緒に選ばれた展示は次のとおりである。  
「時間を越えた響き」(梨花女子大学博物館)、「You are my sunshine」(トータル美術館)、「奈良美智」(ロダンギャラリー)、韓国美術一〇〇年展(国立現代美術館)。  
『東亜日報』二〇〇五年十二月二日付「プロが選んだプロ 分野別ベスト美術今年の展示」

(学習院大学非常勤講師)

\* 「アジアのキュビズム―境界なき対話」展、徳壽宮美術館、二〇〇五年十一月一日～二〇〇六年一月三〇日